

平成二十八年 度

渋谷教育学園渋谷中学校 入学試験問題

国 語

※ 解答は、必ず解答用紙の指定されたところに記入しなさい。

※ ○○字で、または○○字以内で答えなさい、という問題は、「。」「や」「、」「かつこ」なども一字と数えます。

— 次の文章を読んで後の問いに答えなさい。

【「私」は小学生のある時期、伯母の飼った犬に手を噛まれ、自分は狂犬病にかかったと思い込んでいた。以下の文章は、成長した「私」がその当時のことを振り返る形で書かれている。】

「ママ、私が死んだらどうする？」

私は、たびたび、そんな質問をするようになり母を恐がらせた。

「死ぬなんて言葉を口に出したりしたら、現実になっちゃうのよ。絶対に、そんなこと聞かないでちょうだい」

母の言葉に、私は、無言で首を横に振った。この人は、何も解っていない。私は、母を、いとおしく思った。今度は妹に尋ねた。

「ねえ、お姉ちゃんが死んだら、どうする？」

「そしたら、去年の①タンジョウウビにパパが買った熊の縫いぐるみちょうだいよ」

私は、うなだれて、自分の部屋に戻り、ひとりで、泣いた。孤独だった。

今度は、父にも尋ねてみた。

「パパ、私が死んだら、悲しい？」

父は、げらげら笑った。

「生と死について考えているのか。やあ、さすが、パパの娘だ。この年齢にして、すでに哲学か、いやあ、わっはっはっは、感心、感心」

哲学どころの話ではなかった。私は死につつあるのだ。もしかしたら狂犬病かもしれない。その不安は、死の接近について、考え続けている内に、はつきりと、私は狂犬病であるという確信に変わって行った。私は、六カ月後に死ぬ。この事実だけが、私の頭の中を駆け巡っていた。

私は、物憂い気分になりながら、季節の移り変わりを感じていた。死を意識してから、私のまわりによくはつきりと形を持たないもの、たとえば、季節、たとえば時間、そういったものが、急速に姿を現し始めていた。色を持ち、意志を持ち、私に向かって歩き始めていた。そして、周囲の人々、それは主に家族のことだが、彼らが私の周囲に形成する感情の※モザイクのようなものが、まるで積木のように重ねられていること

も知った。彼らの私に対する感情には、まったく隙間がなかった。母の私に対する思いを手でつまみ、空気の中から、一時的に外そうとすると、その空白を父や妹の感情の塊がおぎなひ、埋めるという感じだった。私は、初めて、家族が愛し合うことに、※真空状態が存在しないことを知った。私の周囲は、濃密な他者からの愛で満たされていた。そして、幸福な人間は、そのことに気付くことがなく、そして、だからこそ幸福でいられるのだということに私は気付いた。幸福は、本来、無自覚の中にこそ存在するのだ。私は、父と母と妹を見て、つくづくそう感じた。その中で、私は、ひとり不安を背負い込んだ。自分が愛に包まれていると自覚してしまった子供ほど、不幸なものがあるだろうか。私は、目の奥の涙腺を縛り上げ、日常から涙を排斥することに全力を傾けた。泣いてしまうと、ますます、彼らの関心を引くことになり、私が彼らの作り上げる空気の均衡を取っているのを改めて思い出すことになる。私は、なるべく、人々に衝撃を与えないように死にたいと心から願った。何事もなく日々が流れて行き、知らない内に、私だけが、彼らの中から抜け落ち、私の死など気付きもしないくらいに家族が幸福であること。私が望んだのは、そのことだった。

さし当たって、発狂するということを遠ざけなければならない。私は、そう思いついた。私は宗教を持っていなかった。どうしたら良いのか、②シアンに連れながら、私は、秋の深まる学校への道を歩いた。

秋は、いつのまにか、匂いすら放っていた。橙色の柔らかな陽ざしは、私の瞳ばかりでなく、鼻までも刺激して、私をたまたまなくさせた。落ち葉を踏みしめながら、私は心の中で叫んだ。③わかったから、あなたが私の側にいるのは、よくわかってるのだから。私は、秋に、そう伝え、聞き分けのない恋人をなだめるように、やさしく息を吹きかけ、抱きしめた。私は、男を愛するという言葉すら、その時、知らなかったが、そういうやり方で、秋を愛した。

教室で、私は、ひとつのことに気付いて愕然とした。私は、それまで、教室の中で、少し風変わりではあるけれども、ものを知っている、いわゆる「おしやまん」としての立場を確立していた。私は、それに満足していた。何故なら、早目に、そういう位置についてしまった私だけが、人の好き嫌いを自分の意志だけで、口に出すことを許されていたからだ。つまり、私は、他の子供たちのように他人の顔色をうかがう、という苦痛からあらかじめ解放されていたのだ。

私は、かなり、それまで、色々な子供たちを④センノウしていたように思う。あの子は嫌い。私は、気に入らない子供を見つけると、そう高らかに⑤センゲンした。それを聞いた何人かの子供たちは、私の言葉によって、名指しされた子供を理由もなく憎んだ。私は、自分には、何の責任もないと信じていた。私は決して、自ら、手を下して、人を苛めるような愚かなことをしなかったから。

そのようにして、教室での価値を失なうて行った子は何人かいた。私は、晩年を迎えてからというもの、その子たちに対する罪悪感にさいなまれるようになった。私は、自分のしたこと、残酷さを悟り、いてもたってもいられなかった。私には、解り始めたのだ。私が、⁽³⁾彼らを排除すべく、他の子供たちに行動を起させたのは、恐怖からだったということ。私が、嫌いだと叫んだ子供は、皆、ある意味で私に似ていた。私のようなくらい知恵さえあれば、誰もが、私の位置につくことが出来ただろう。けれど、彼らは、そうしない子供たちだった。何故なら、彼らは、そのことが、格好の悪いことであることを知っていたからである。あるいは、私の使う労力は、まったくわり、に合わないということを、彼らが悟っていたからである。私の使う労力。それは、すなわち自意識というものに他ならなかった。

私は、秋の陽ざしに愛を告げ、そして、彼らを思い、自らを恥じ、死と発狂の恐怖に怯え、家族への愛情を噛みしめるといふ、それまで経験したこともない日々を送っていた。私は、心を使うことに多忙だった。

忙しさに慣れない私は、時々、訳が解らなくなり、放課後の教室を歩きまわった。気を鎮めようとしたのかもしれない。図書室で、手続きをせずに本を鞆に入れた。つまり、盗んだ。音楽室のピアノを勝手に開けて、白い鍵盤を絵具で染め上げた。つまり、悪戯をした。男子便所で、立って、おしっこをしてみようと新しい方法に挑戦してみた。結果として、単に汚した。私は、ありとあらゆる、それまでしたことのない未知の行動というものに、しばらくの間、自分を賭けた。けれど、長続きはしなかった。朝礼で、原因不明の惨事が取り上げられたからだ。私は、もちろん、心の中で詫びていた。でも、仕方がない。私は、晩年を迎えて、常軌を逸していたのだから。

私は、これを最後にしようと、ある日の夕方、理科準備室に忍び込んだ。そこには、授業に使う、さまざまな石があった。石灰岩や凝灰岩や雲母、なんと水晶まで無造作に箱に放り込まれて、棚で、息をひそめていた。

私は、感激のあまり、胸が痛くなった。私は、⁽⁵⁾自分の心臓が、酸を味わった舌のように、きゅんときゅんを感した。私は、石に囲まれて、すべてのことを許しつつある自分に気付いた。

石灰岩には、大昔のさまざまな生き物たちが型押しされていた。幾重にも層をなし、それらは、長い年月を隔てて現在に運ばれて来たしるしを残しながら、とても小さな姿で、私の手の平に載っていた。

夕陽を浴びて、きらきらと輝く雲母を、私は一枚、丁寧に剥した。ところが、その一枚に見えたものは、羽のように薄い雲母が重ねられたものだった。ちっぽけに見えて、歴史を背負っているその石を私は、きつく握りしめた。なんて、可愛いやつ。私は、漠然と自分の後ろに広がる何かを思いきり抱きしめて、喜ばせてあげたいような気持ちに駆られた。

その他のさまざまな石も取り出し、私は、順番に、それらを床に並べた。マグマの欠片もあった。名も知れない銀色の粉を隠し持ったすみ置けない石もあった。水晶にいたっては、その角ばったコオリザトウのような高貴な姿に興奮し、すんでのところ、口に入れてしまうところがあった。石は、皆、死んでいた。そして、私は、それらを、心から愛した。

私は、鞆の中に、丁寧に、それらを入れた。眠りから覚めていない子供たちを扱うように、ひっそりと、鞆の奥深くに、私はそれらをしまひ込んだ。そして、何くわぬ顔をして、理科準備室を出た。鞆は、とても重く重くなっていたが、私の気持は、浮き立っていた。

(山田詠美『晩年の子供』より)

※モザイク……ガラス・貝殻・石・木などの小片を寄せて作る模様。

※真空……ものが全く存在しない空間。

問一 ―線①～⑤のカタカナを漢字に直さない。漢字は一画ずついいねいに書くこと。

問二 ― 線(1)「私は、母を、いとおしく思った」とありますが、それはなぜですか。最もふさわしいものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 母が「私」の病気を全く気にかけていないことを悲しみながらも、「私」に死についての正しい認識を伝えようとしてくれる母の親心を感じたから。

イ 「私」が抱えている死の恐怖に母が気付かずにいることを心細く感じながらも、「私」を励まそうとしてくれる母の気づかいを感じたから。

ウ 「私」を意のままにあやつろうとする母の高圧的な言葉にいらだちを覚えながらも、娘に健康で長生きしてほしいという母の思いやりを感じたから。

エ 迷信にとらわれて「私」の話にとりあわない母の態度に不満を感じながらも、昔からの教えをけなげに守っている母の懸命な思いを感じたから。

オ 「私」の抱える死への不安を母に理解してもらえないことに孤独を感じながらも、娘を失う運命を知らずにいる母の変わらぬ愛情を感じたから。

問三 ― 線(2)「わかったから、あなたが私の側にいるのは、よくわかってるのだから」とありますが、「私」がそのように「心の中で叫んだ」のはなぜですか。最もふさわしいものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 心の平穏を求めて自然の美しさに目を向けると、冬に向けて生命が最後のがやきを放つ様子に胸をしめつけられ、死への恐怖から目をそむけるためには季節を意識せずにいたいと思ったから。

イ 学校への道をゆつくりと歩いてみると、秋という季節が自分の存在を認めさせようと主張しているような気がして、死についてゆつくり考えるためにはひとり静かな心持ちでいたいと思ったから。

ウ 自分は狂犬病であるという確信を抱くようになると、残された時間という形を持たないものが姿を現したように思われ、もう二度と秋という季節を迎えることはできないように思われたから。

エ 自らの死を現実のものとして考えるようになると、移り変わっていく季節がはっきりと意識されはじめ、秋という季節が意志を持つてしき

りにその存在を訴えかけてくるように思われたから。

オ 近づいてくる死について思いをめぐらせていると、秋という季節が自分をこの世界に必死に引きとめようとしている聞き分けのない恋人のように感じられ、言いようもなくいとおしく思われたから。

問四 ― 線(3)「彼らを排除」とありますが、「私」が「彼らを排除」したのはなぜですか。三十一字以上四十字以内で説明しなさい。

問五 ― 線(4)「未知の行動というものに、しばらくの間、自分を賭けた」とありますが、「未知の行動」に「自分を賭けた」とはどういうことですか。最もふさわしいものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 誰にも相談できない孤独に耐えられなくなった「私」は、他者を困らせる行動をとることによって、自分の苦しみを分かってくれる人を探そうとしたということ。

イ 死への覚悟を固めつつあった「私」は、前からしてみたかったことに一つ一つ挑戦することによって、残りの人生を悔いなく過ごすとしたということ。

ウ かつてない混乱の中にあった「私」は、これまでしたことのない行動に身を投じることによって、未知の状況に対処する糸口を見出すとしたということ。

エ 生きていることを実感できなくなった「私」は、悪いことばかりをすることによって、いつ怒られるか分からないというスリルを味わおうとしたということ。

オ 病気は治ったのではないかという希望を捨て切れずにいる「私」は、命の危険をとまなう行動に出ることによって、自分の運を試そうとしたということ。

問六

——線⑤「自分の心臓が、酸を味わった舌のように、きゅんとくぼむを感じた」とありますが、この場面での「私」は、石についてどのようなことを感じていますか。最もふさわしいものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 箱の中の石は、太古の生き物が型押しされているなど気味が悪い点もあるが、地球の長い歴史を感じさせる堂々とした姿をしており、美しく感じている。

イ 箱の中の石は、それぞれに美点を備えた可愛らしいものであるにもかかわらず、長い年月のなかでふるびてしまっており、かわいそうに思っている。

ウ 箱の中の石は、人々の関心をひくこともないちっぽけな存在でありながら、それぞれの歴史を背負った気高さを感じさせており、いとおしく感じている。

エ 箱の中の石は、眠りにについている子供たちのように無防備で弱々しい存在でありながら、それぞれに個性ある高貴な姿をしており、感動を覚えている。

オ 箱の中の石は、水晶や雲母など貴重なものばかりであるにもかかわらず、理科準備室という身近な場所に無造作に保管されており、驚きを感じている。

問七

本文の表現上の特徴についての説明として最もふさわしいものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 間近に迫る死という運命を受け入れようとする激しくかつ細やかな心の動きを、臨場感を感じさせる体言止めを多用することで生き生きと表現しており、時に大人びた表現や冷静な分析を挟み込むことによって、文章に味わいをもたらしている。

イ ささまざまなものごとに対し敏感に反応する子供らしい心の動きを、子供の感性を反映した比喻を用いながらも、大人びた表現で冷静に説明しており、読点を多用したり短文を挟み込んだりすることによって、文章にリズムをもたらしている。

ウ 死に直面した子供の心情という表現の難しい対象を、積木や石といった象徴的な事物を中心として物語を組み立てることで分かりやすく表現しており、長く説明的な段落を中心として本文を構成することによって、物語に厚みをもたらしている。

エ 死を覚悟した小学生が経験する一つ一つのできごとを、それに対する個性的な解釈を示しながらも、客観的かつ具体的に描写しており、時に「私」以外の登場人物の視点に寄り添う語りをを用いることで、物語に多面性をもたらしている。

オ 死をめぐる精神的な混乱の中でさまざまな発見を経験する子供の心情を、するどい人間理解と豊かな表現力をもって印象的に描き出し、おり、会話を通して多くの登場人物の内面を明らかにすることで、物語に広がりをもたらしている。

(問題は次のページに続きます)

二 次の文章を読んで後の問いに答えなさい。

私たちの知性はどこかで時間を少しだけ「フライング」することができるといえる。知性が発動するというのはそういうときである。まだわからないはずのことが先駆的・直感的にわかる。私はそれが知性の発動の本質的様態だろうと思う。

あらゆる自然科学は、一見※ランダムに生起しているかに見える自然現象の背後に数理的な法則性が走っていることを直感した⁽²⁾科学者たちによって切り拓かれてきた。その科学的知性の※プロトタイプは、自然を前にしてじっと観察している⁽³⁾子どもたちに見ることができるといえる。子どもたちを自然の中に放置すると、しばらくしてそれぞれの興味に従って「観察するもの」を選び出す。あるものは昆虫を眺め、あるものは花を眺め、あるものは空の雲を眺め、あるものは海岸に寄せる波を眺める。そうしているうちに、子どもたちがふっと観察対象のなかにのめり込む瞬間が訪れる。それは彼らの様子を横で見ているとわかる。いったいどういう場合に「のめり込む」のか。それは「パターンを発見したとき」である。虫の動きのうちにある法則性があることを直感したとき、花卉のかたちにある図形が④ハンパクすることを直感したとき、岸辺に寄せる波の大きさに一定のパターンがあることを直感したとき、子どもたちは彼らなりのささやかな「予想」を立てる。もし自分の仮説が正しければ、次は「このこと」が起きるはずだと考える。そして自分の「予想」の通りの「イベント」が起きるかどうか息を詰めて見守る。そのとき、子どもたちは自然の中に一步踏み込み、自然と融合している。それは、はたで見えていても感動的な光景である。そのとき、私たちは彼らのうちで科学的知性が起動した瞬間に立ち会っているからである。

このような「対象へののめり込み」は「ずばり一言で言えば」というシンプルな説明を求める知的渴望とは似て非なるものである。どちらもランダムな事象の背後に存在する数理的秩序を⑤キキウしている点では変わらない。でも、一点だけ決定的に違っているところがある。それは先駆的直感には時間がかかっていることである。

自分がある法則を先駆的に把握していることはわかるけれど、それをまだ言葉にできないときの身もたえするような前のめりの構えにおいて、時間は重大なプレイヤーである。「まだわからないけれど、そのうちわかる」という予見が維持できるのは、時間の経過とともにその予見の輪郭や手触りがしだいに確かなものに変じてゆくからである。「熟す」という言い方をしてもいい。青い果実が時間とともにしだいに果肉を増し、赤く変色し、ずしりと持ち重りのする熟果になる※プロセスにそれは似ている。※Time is on my side というローリングストーンズの名曲があるが、「時

間は私の味方である」というのは、時間の経過とともに自分の予見や願望がしだいに現実性を増してゆくことが今この瞬間も感知されているメッセージを語っている。

※フェルマー予測は証明までに360年がかかった。一人の人間の寿命どころか、一つの王朝の⑥コウボウに匹敵する時間である。その予測が維持されたのは、時間の経過とともに予測の証明に「近づいている」という実感を世代を超えた数学者たちが共有したからである。

④「私が見ているものの背後には美しい秩序、驚くほど単純な法則性が存在するのではないか」という直感はある種の「ふるえ」のような感動を人間にもたらす。その「ふるえ」は、その秩序や法則を発見した「個人」が名声を得たり、学的高位に列されたり、世俗的利益を得たりすることを期待しての「ふるえ」とは違う。「誰にでもすぐにその価値や意味が理解されそうな発見」はたぶんそれほどの感動をもたらさない(経験したことがないから想像だが)。ノーベル賞級の発見をしたのだが、※ジャーナルに早く投稿しないと、「他の誰か」が自分と同じ発見をして、※ブライオリティも特許も奪われてしまうかもしれないと恐れているときの「ふるえ」は、私が話しているものとは違う。「他の誰か」が自分と同じ発見をしてしまうかもしれないから「急ぐ」という構えそのもののうちに、⑤何か本質的に反知知的なものであるということが本人にもわかっているなら、実はそれはそれほど直感的ではなかったということだからである。真の直感はずっと大きな時間の流れの中に人を置く。

自分は今、これまで誰も気づけなかった「巨大な知の氷山」の一片に触れた。それはあまりに巨大であるために自分ひとりでは、一生をかけても、その全貌を明らかにすることはできない。だから、これから先、自分に続く多くの何世代もの人々との長い協働作業を通じてしか、自分が何を発見したのかさえ明らかにならないだろう。そのような宏大な見通しのうちで、まだ顔も知らない(まだ生まれてもない)未来の協働研究者たちとのたしかかな連帯を感じるときに、ひとは「ふるえ」を覚えるのだと私は思う。

ひとが「ふるえる」のは、自分が長い時間の流れの中において、「いるべきときに、いるべきところにいる、なすべきことをなしている」という実感を得たときである。「いるべき」ときも、「いるべき」ところも、「なすべき」わざも、単独では存立しない。それは、死者もまだ生まれぬ人たちをも含む無数の人々たちとの時空を超えた協働という概念抜きには成立しないのである。もう存在しないもの、まだ存在しないものたちとの協働関係というイメージをありありと感知できた人間のうちにおいてのみ、「私以外の誰によっても代替し得ない使命」という概念は※受肉する。

自然科学というのはまさにそのようなものである。科学性とは何かということについて深く考究したカール・ポパーはこんな例を挙げている。無人島に漂着したロビンソン・クルーソーが孤島に研究室を建て、そこで冷徹な観察と分析に基づいて膨大な数の論文の執筆をなしたと仮定する。その研究成果は現在の自然科学の知見とぴたりと一致するものであった。さて、クルーソーは「科学者」だと言えるだろうか。ポパーは「言えない」と答える。ロビンソンの科学には科学的方法が欠如しているからである。

「なぜなら、彼の成果を吟味する者は彼以外にはいないし、彼個人の心性史の不可避免的な帰結であるもろもろの偏見を訂正しうる者は彼以外にはいない」からである。

【中略】

私はポパーが「科学」について述べたことは「知性」についてもそのまま準用できるだろうと思う。科学の場合と同じく、知性が知性的でありうるのは、それが「社会的あるいは公共的性格」を持つときだけである。個人がいかに「知性的であろう」と念じて、人は知性的であることはできない。知性は「社会的あるいは公共的」なかたちでしか構築されないし、機能もしない。

ただし、「社会的あるいは公共的」という言葉から、「学芸」のようなものを漠然と想像すべきではないだろう。複数の専門家が一堂に会して、相互に忌憚なくギョウセキを評価する仕組みができていたというだけでは「社会的あるいは公共的」という条件は満たされない。現に、20世紀のイコウでも、さまざまな国家において当代一流の学者たちがぞろぞろと時の権力者の喜びそうな学説の保証人になった例を、私たちはいくらかでも知っているからである。ある一時点において多くの支持者を得た支配的な学説であるということだけでは「社会的あるいは公共的」という条件は満たされない。「社会的あるいは公共的」であるためには、時間を味方にしなければならぬ。時間の経過とともに、学説のあちこちに散乱していた「満たされるべき空虚」がひとつひとつ充填されてゆくような力動的なしかたで構成されたものを「社会的あるいは公共的」な言明と呼ぶべきだと私は思う。そのようなプロセスが出来るためには、そのプロセスには「原理的にその場に居合わせることでできないもの」たちも含まれていなければならない。

X にも Y

(内田樹「反知性主義者たちの肖像」『日本の反知性主義』より)

※ランダム……意図的でなく、でたらめなこと。法則性のないこと。

※プロトタイプ……原型、基本のかたち。

※プロセス……過程、経過。

※Time is on my side……「Time is on my side」を日本語に直すと、直後にある「時間は私の味方である」となる。

※フェルマー予測……フランスの数学者フェルマーが十七世紀なかばに発表した数学における予想。以後多くの数学者がその証明に挑戦しつづけた。二十世紀の終わりにイギリスの数学者がその証明を完結させた。

※ジャーナル……学会誌。

※プライオリティ……優先権。

※受肉する……ここでは、現実のものとして実感されること。

※忌憚なく……遠慮なく。

※充填……満たすこと。

問一 線①～⑤のカタカナを漢字に直しなさい。漢字は一画ずついいねいに書くこと。

問二 線(1)「『フライング』」とありますが、それはどういうことですか。最もふさわしいものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア ある問題について人間の知性が、正確な答えはまだわからないが、答えが確実に存在することを感覚的に察知すること。
- イ ある問題について人間の知性が、答えが全くわからない状態から、正解に至る道筋を突如として明確に感知すること。
- ウ ある問題について人間の知性が、答えがあるのかどうかに疑いを持ちながら、経験をもとに法則性を求めようとする。
- エ ある問題について人間の知性が、その答えの存在を確信するがゆえに、不正に他の可能性を排除してしまおうと考えること。
- オ ある問題について人間の知性が、その答えの存在に疑問を抱くことなく、先駆者として真実を追究しようと進んでいくこと。

問三 線(2)「科学者」、(3)「子ども」とありますが、筆者の考える両者の共通点は何ですか。五十一字以上六十字以内で説明しなさい。

問四 — 線(4) 「『私が見ているものの背後には美しい秩序、驚くほど単純な法則性が存在するのではないか』という直感はある種の『ふるえ』のような感動を人間にもたらす」とありますが、それはなぜですか。六十一字以上七十字以内で説明しなさい。

問五 — 線(5) 「何か本質的に反知性的なものがある」とありますが、筆者がこのように述べるのはなぜですか。最もふさわしいものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 大発見をした後に特許を取るために急いでジャーナルに投稿しようという知のあり方は、時間の経過とともにその発見の価値が明らかになり、真理として認められていくという本来の知のあり方には合致しないものだから。

イ 他の誰かでも発見しうるような代替可能な価値しか持たない知のあり方は、所詮はそれほど大きな価値を持つものではなく、時間の経過とともに発見者の権威が増していくという本来の知のあり方に矛盾するものだから。

ウ 自分ではない他の人間でもほとんどなく辿り着いてしまうことが明らかであるような知のあり方は、自分と志を同じくする後代の人々の営みによって、真実に徐々に近づいていくという本来の知のあり方に反するものだから。

エ 誰もがすぐに認めてくれるよう自分の発見を一言でシンプルに言い表そうとする知のあり方は、大きな時間の流れにさらされ、あるべき姿が移り変わっていくという本来の知のあり方とは相容れないものだから。

オ 同時代の権力者に気に入られるような学説ばかりを唱える知のあり方は、様々な学説に点在している欠点を何世代もかけて補い、完成させていくという本来の知のあり方とは似て非なるものだから。

問六 — 線(6) 「『学会』」とありますが、筆者がこの例を挙げたのは何のためですか。最もふさわしいものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 自分の専門性を評価してもらう会議においては、一流の学者たちの喜びそうな学説を提唱した方が有利に働くことがあるということを示すため。

イ その道の専門家たちが集まって研究の意義を判断する機関があっても、政治的な介入がその判断を狂わせることがあるということを示すため。

ウ 多くの有力な学者が参集して研究成果を発表し合う場においては、その社会の文化的伝統の中において意義が認められるか否かが重要であるということを示すため。

エ 当代の代表的な学者や知識人たちが研究の価値を認める機会があっても、その一時点のみにおける見解が真理であるとは限らないということを示すため。

オ どれほど偉大な専門家が集まって学説の学術的価値を検証しても、それが実社会から公正であると認められなければ無効であるということを示すため。

問七

X

、

Y

に入る語の組み合わせとして最もふさわしいものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

- | | | | |
|-----|----------|---|-------------|
| ア X | 子どもたち | Y | 科学者たち |
| イ X | 過去の科学者たち | Y | 異国の科学者たち |
| ウ X | 時の権力者たち | Y | 名もなき市民たち |
| エ X | 支持者たち | Y | 反対者たち |
| オ X | 死者たち | Y | いまだ生まれざる者たち |

(問題は以上です)

平成二十八年 度

国語解答用紙

渋谷教育学園渋谷中学校

※らんには記入しないこと

受 験 番 号	
	番
氏 名	

合計得点	※
------	---

—
問一
①
②
③
④
⑤

問二	
問三	

[illegible]

問五

問六	
----	--

問七	
----	--

二
問一
①
②
③
④
⑤

問二	
----	--

[illegible][illegible]

問五	
----	--

問六	
----	--

問七	
----	--

✱

✱

8

✕

✖

5